活躍する先輩たち



さまざまな現場での仕事を通じて
能力や実績を積み重ね、
信頼される施工管理者になりたい。

株式会社 大兼工務店
建築施工管理

2024年専門課程 住居環境科 修了　**村田 皆斗さん**

学生時代に取得した資格　●2級建築施工管理技士補

夢のはじまり
工業高校で育んだ力

製図に夢中になった工業高校時代

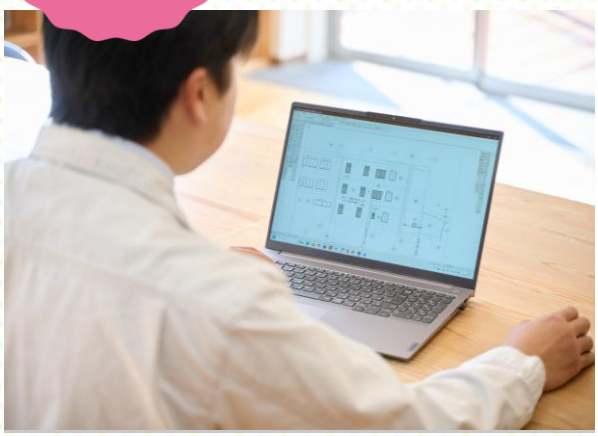

現場へ出向く前に図面を確認

子どもの頃から大工になりたいという夢があり、木の香りや質感が好きで木材加工の職人にもあこがれを持っていたので、建設科のある工業高校へ進学しました。特に好きだったのは、製図の実習の時間です。限られた時間の中で、いかに自分が満足できる図面が仕上げられるかにこだわっていました。自分の描いた図面がほめられるとうれしかったですね。卒業後の進路を考えたとき、すぐに大工として就職する道もありましたが、実習などを通して「もっと専門的に学んで、知識を深めてから社会に出たい」という思いが強くなり、進学を決意しました。

滋賀職能大との出会い

未来を広げる学び

自分が興味ある分野と学びが直結



施工管理にはCADの操作も必要

地元を離れることは考えていなかったので県内の学校を探していたところ、滋賀職能大のことを知りました。早速、オープンキャンパスに参加してみると、住居環境科という自分がやりたいことに直結している分野の学科があることがわかりました。さらに資格取得や就職支援が手厚いことや学費が他の学校に比べて安いことも大きな魅力に感じました。ちょうど高校に指定校推薦の枠もあったので入学を決めました。住居環境科は、その名の通り人が快適に暮らせる環境について学ぶ学科です。施工技術はもちろん、住まいに関して幅広く学習するので施工管理などにも興味を持つようになりました。

成長を実感

身に付いた技能と自信

思い出に残る卒業制作での東屋製作



毎日現場へ出向き施工状況を確認

1年次は工業高校で学んだことをベースに理解をより深める時期でした。2年次からは実習が中心のカリキュラムとなり実践的なスキルが身に付き、2級建築施工管理技士補の資格取得もできました。最も心に残っているのは、グループで取り組んだ卒業制作です。キャンパス内に休憩スポットとなる東屋（あづまや）を自分たちの手で建てました。設計から木材の加工、建築まですべてを自分たちで行う中で、屋根の加工が難しかったのを覚えています。図面通りに上手くいかず細かく調整していきました。この経験を経て平面の図面から完成形を立体的にイメージできる想像力が身に付いたと思います。

社会での活躍

技能で明日を開く

施工管理の仕事を通じて日々成長



図面通りに施工されているかをチェック

当初は大工志望でしたが、施工管理の仕事に興味を持ち、学内企業説明会をきっかけに株式会社大兼工務店へ入社しました。現在は、工事部建築課で民間企業の事務所や倉庫、自治体などの公共施設などの新築工事を担当しています。私は毎日現場へ向かい、各工程が図面通りに施工されているかを確認して工事日報やお客様に提出する工事写真帳を作成しているほか、安全な現場環境づくりに取り組んでいます。目標は周囲から「この人のために頑張ろう」と思われる人間になること。人から信頼されるような能力や実績、そして人間性やコミュニケーション能力を身に付けられるように頑張ります。

未来の後輩へ
これから進路を選ぶみなさんへ

少人数制だからクラスメイトとの仲も深まる



働きやすい広々としたオフィス

滋賀職能大は、1クラス20名の少人数制なので、入学から早い段階でクラスメイトとの仲を深めることができる学校です。実習や課題を通して切磋琢磨するうちにクラスが1つになっていく感覚が味わえると思います。2年間一緒に過ごしているうちに、ただ勉強したり、スキルを身に付けたりするだけではなく、人とのつながり方や関わり方についても考える貴重な時間になります。また、滋賀県内だけではなく全国各地から学生が集まってきているので、自分自身の世界も広がります。楽しく充実した学生生活を過ごせた学校だったと思います。

上司の方から Message

信頼される現場監督となることを期待

滋賀職能大で培った基礎や専門的技術が現場での実践力として大いに活かされています。入社直後から熱心で、光波測量や図面作成などの技術的なスキルを着実に習得しながら現場管理の知識も深め、社内で新人賞を受賞しました。現在は、他社と共同で進める大規模なJV案件（共同事業）を担当しており、若いうちから大きな経験を積んでいます。ここで得た貴重な経験を基盤に、自分が主体となって現場全体を管理・運営できる、信頼される現場監督へと成長することを期待しています。



株式会社 大兼工務店 工事部 建築課 課長 **南 和真**さん

（内容は2026年1月取材時のもの）